

春夏秋冬 台湾徒然

第24回

ナミイのおばあが やってきた

柳本通彦

三線サンレン抱いてひとり旅、放浪のお座敷歌手——ナミイが、この春、およそ60年ぶりに台湾の土を踏んだ。大戦終結時に、無一文で故郷に引き揚げて以来のことである。

ナミイは、かつて、台北市郊外にある北投温泉ほくとうの料亭で仲居をしていた。戦争末期になると、湯の里は日本の兵隊であふれるようになり、特攻隊員が最後の宴を開いたこともあった。今回、若者たちの切ない青春を目にした思い出の地を初めて再訪したのだった。ナミイこと新城浪あたらしなみさんは、大正10年に石垣市で生まれた。家は貧しく、わずか9歳で売られ、那覇の遊郭へ。幼い手には太すぎる棹さかだったが、そこで仕込まれた三線が皮肉にもその後の人生の支えとなった。

孤独で不安な5年を耐え、幸運に

も親戚に助け出された浪さんだが、そこから彼女の放浪の日々が始まったともいえる。太平洋を越えてサイパンへ、そして、同郷の人から嫁入りの話が来て、台湾高雄に渡ったが、おりから太平洋戦争が激しくなり、亭主も出征してしまう。独りになった浪さんが流れ着いたのは、当時台湾随一の温泉郷・北投だった。

仲居、酌婦、芸者、舞妓——当地最高級の料亭には、四種の女性が働いていたという。客の前に出る従業員は全員日本人だったが、なかでも仲居は、客の要望を聞いて、料理や「女」の仕込み一切を取り仕切る重要な役柄だった。浪さんは、まだ20歳を過ぎたばかりという年齢も、沖繩出身であることも、三線ができることも黙して、磨きぬかれたヒノキの廊下を走り続けた。



新城浪さん(皇太子來台記念碑にて)

戦争末期になると、兵隊の宴会で座敷が埋まるようになり、明日には空に散るといふ特攻隊員の幼い姿を見ることもあった。酌婦が慰安婦にされる痛ましい現実にも遭遇した——そして敗戦。

故郷の石垣に戻った浪さんにはやはりお座敷の仕事しかなかった。三線片手に、呼ばればどこにでも出かけて歌った。ちゅら海(美しい海)を越えて、宮古へも、日本最西端の与那国にも行った。覚えた曲は3000曲。民謡から演歌、流行歌……何でも歌った。

しかし、ただの流しや芸者ではない。「必ず楽しい宴会にしてあげますよ」が、浪さんの「売り」だった。年取ってできた娘にいい婿が来た。

初めて家庭の味を知った。85歳の高齢ながら、浪さんは、いまでも日本列島をところ狭しと走り回っている。

ライブのCDが出た。浅草木馬座の公演が実現する。そして、主演映画の話もきて、思いがけないことに台湾口ケの話が降って湧いたのである。

石垣港から船で6時間。浪さんは基隆港に降りたつや直ちに北投温泉に向かった。かつての料亭はしやれたりゾートホテルに生まれ変わり、周りは激変していた。しかし、同僚とよく通っていた公衆浴場「瀧乃湯」、皇太子來台(大正12年)の記念碑、そして特攻隊が宴会を開いた旅館の大広間が昔のままに残っていた。

浪さんは、その座敷に座って、集まった人たちに当時の思い出を語り、三線を手に隊員たちがもつとも好きだったという「おはら節」を歌った。ビードロのような窓ガラスが鳴り、その場が一瞬60年前に戻った。口癖は、「わたしや百二十まで生きるよ」。ナミイ主演のドキュメンタリー映画(本橋成一監督)は、今秋の山形映画祭に出品され、年末より東京を皮切りにロードショー公開される。

やなぎもと・みちひこ

京都市生まれ。著書に「台湾先住民・山の女たちの聖戦」(現代書館)「台湾革命」(集英社新書)など。99年度「潮賞」ノンフィクション部門優秀賞受賞。最新刊に「明治の冒険科学者たち」(新潮新書)。